



女性研究者の単身子連れ 在外研究のあれこれ

坊農真弓(国立情報学研究所)

ハッピーな国, オランダ

さて、今回の記事では私が現在滞在しているオランダの良いところを挙げたいと思います。まずオランダは、ワークライフ・バランス先進国で、「世界で最も労働時間が短い国」であると同時に、「子供の幸福度世界一」だそうです。私のオランダ人の印象は、「自然を大切にし、質素に暮らす人々」です。とても質素な暮らしをされているので、経済的には日本の方が豊かかもしれないという印象も持ったのですが、インターネットで検索してみると、オランダの国民一人あたりの名目 GDP（国内総生産）は2003年に日本を抜いています。

オランダといえば自転車の国ですが、道路や鉄道も国の隅々まで整備されていて、google マップ片手に電車やバスを乗り継いでどこまででもいけます。また、電車やバスの車両一つひとつが無料の Wi-Fi を飛ばしていて、乗り込んで一度 Wi-Fi 接続したら、トップ画面で電車の遅延や到着予想時刻などの情報をオランダ語と英語で見ることができます。公園には子供のための遊具が必ずあり、丁寧に整備されています。街のあちこちに花壇や鉢植えがあり、市や村がそれらを管理し年中綺麗な花を咲かせます。オランダといえば、ゴッホ (Gogh)、レンブラント (Rembrandt)、フェルメール (Vermeer)、エッシャー (Escher) などの名高い画家を輩出した国でもあり、芸術や文化に触れる機会がたくさんあります。また、教育面でも、公立学校でモンテッソーリ (Montessori)、シュタイナー (Steiner) といった日

本でもよく耳にする教育方法に沿った教育が提供されています。これはまだほんの一部です。オランダの良いところはまだまだたくさんあります。

そこでふと思うのは、2020年に東京で開かれるオリンピックにオランダの人たちがやってきたら、日本はどういう国に見えるだろうか、日本人はハッピーに見えるだろうか、ということです。

オランダの ワークライフ・バランス

私の滞在はあと2カ月で終了しますが、この1年間、研究上だけでなく、働き方や家族との過ごし方についてもたくさん刺激を受けました。私の娘は、日中はインターナショナルスクールに通い、放課後は地元のスイミングスクールやバレエスクールに通っています。子供の柔軟性はすごいもので、学校でも習い事でもベストフレンドができ、毎日を楽しんでいるようです。

オランダは、働く日を週に3日だけにしたり、1日の労働時間を6時間に調整するなどして、「世界で最も労働時間が短い国」としての地位を守り続けています。オランダ人は「パートタイム」で働くのが一般的で、パートタイムであってもフルタイムであっても全員が正社員として自他を認識し、会社内のメンバシップを保っています。では、パートタイムで働くオランダ人は、仕事以外の時間に何をしているのでしょうか。そうです、男性も女性も平等に家事育児にかかわっているのです。



学校や習い事の送り迎えの際、同じく子育て中の両親を目にします。オランダに来てまず驚いたのが、送り迎えをする父親の数です。午後早い時間のお迎えや習い事への送迎の際にも父親をたくさん見かけます。また、オランダは家族の誕生日をとっても大切にしているのですが、誕生日を家族と過ごすために欠勤するというのも珍しくありません。「働くのは家族と幸せに過ごすため」という労働に対する基本姿勢がまったくぶれていない印象を持ちました。

その一方で私は「単身子連れ在外研究」という道を選び、夫を日本に残して、娘と2人でオランダで毎日を過ごしています。こんな私の状況を見て、フランスの共同研究者は、「フランス人には同じことはできない。フランス人は家族が一番大切に離れられない存在。日本人はよく家族と離れて暮らす決断をするがあなたたちは精神面でとても強い」と言われました。日本を出る前は、「こんなチャンス滅多にないから、家族と1年離れることなんて構わない、国際的な研究活動がしたい」と意気込んでいましたが、いまとなっては日本人以外から見て、私たちの判断はどのように映るのだろうと思うようになりました。

制限された時間の中で 集中して仕事する

滞在当初私は、仕事と子育てを両方うまく回すべく、日本時間に合わせて早朝から仕事し、午後は育児のために仕事をするのを「諦めよう」と思っていました。たとえば深夜の2時くらいから自宅で日本とスカイプでミーティングしたり、論文を読んだり書いたりし、7時から自分と娘の分のお弁当を作って8時半には学校に送り、その後9時すぎに研究所に到着して午後2時半までデータ分析や論文執筆、打合せをするという、オランダにいながら日本時間を生きる日々です。娘の学校は午後3時に終わるので、研究所を午後2時半にはでなければいけません。午後2時半に仕事を終わらせないといけないということは、日本で終電まで仕事をするのも度々あった私としては、なかなか慣れないことでした。

しかし、滞在も半年が過ぎたころ、研究所に5時間しかいられない、その制限された時間の中で集中して質の高い仕事ができるようになってきました。私は元々朝型の人間なので、朝5時くらいに起床する毎日はいまも変わりませんが、研究所でより質

の高い仕事をするためにも、朝起きたら日本から届いているメールや日本のプロジェクトミーティングや学生の指導を自宅で済ませて研究所に向かいます。午後3時には娘に会えるという喜びがより集中力を高めてくれます。いまでは、午後の仕事を「諦める」のではなく、納得して仕事を終え、娘との時間を大切にするという考え方になりました。

日本時間とヨーロッパ時間

日本人は真面目で勤勉な性格から、一般企業などでは長時間働く傾向があります。また、職場にいたことが評価されるという意識があります。日本の研究者も研究室にこもる傾向があり、研究室の電気が一切消灯されず、「不夜城」と呼ばれる大学院もあります。ヨーロッパの大学に留学する日本人学生やポスドク研究員などは、「朝夜関係なくよく働く」「ずっと研究室にいる」などと言われることがあります。日本人の労働に対する美意識は、「長い間そこにいて、すべて目撃し、すべてにかかわる」ということなのかもしれません。しかし、日本人はもっと他者を信頼し、役割分担をして仕事や研究に勤しむ方がよいのではないかなと思うようになってきました。一般的に、職人気質の日本人はチームを作らず、自分1人で何事にもチャレンジしようと思う側面があるように思います。欧米諸国の企業や研究所を見ると、まず有力なチームを構成し、それぞれが与えられた役割を与えられた分こなしているように感じます。これは、職場や研究室だけではなく、家庭にもいえることです。母親が家事育児のすべてを抱え込むのではなく、家庭をともに作る父親や自分の両親などとチームを構成し、役割分担するべきではないでしょうか。日本は長時間集中して同じことをすることに美徳を感じているように思いますが、ヨーロッパは短時間で切り替え

て効率良く進めることに美徳を感じているように思います。

自分のことを熟考し、 ハッピーに仕事する

私はアラフォーの女性研究者です。研究を始めた院生のころ、「理系は30代で頭角を現すべきで、文系は40代から花開き始める」と聞いたことがあります（情報学周りに特化した話かもしれません）。私は現在理系の所属に籍を置いていますが、元々は文系の人間です。この話を聞いたとき、理系と文系両方にまたがって生きていくことができれば、30代始めから40代の終わりまで豊かな時間が過ごせるのではないかと考えました。いま40歳に差しかかり、「一生ものの、自分にしかできない研究をしたい」と思う気持ちが強くなってきました。せわしない日本を離れ、オランダで過ごした1年間、自分がすべき仕事や40代で花開くための方向性が見えて来た気がします。

自分自身の技を磨き、知識を溜め込むのではなく、周りとの関係性の中から自分のことを熟考し、ハッピーに仕事することが大切だと思うようになりました。

前回と今回、女子部のコーナーにオランダ滞在記を書かせていただきました。前回はスタートアップに関する記事で、今回は1年間の滞在を終えての感想といった内容になりました。オランダの良いところをたくさん列挙し、日本のことを心配する気持ちを中心に書きましたが、日本にももちろん素晴らしいところはたくさんあります。素晴らしい部分を残しつつ、働き方や家族との過ごし方について、もっと多くの人と議論できる場を持っていきたいと思っています。

(2017年2月2日受付)